〔資　料〕

妙幢淨慧撰『佛神感應錄』翻刻と解題（五）

阿部美香・大久保美玲・塚本あゆみ・関口靜雄

〔解　題〕

淨慧の周縁④

元禄五年（一六九二）一月十五日、健勝であるにもかかわらず黄檗山第四代住持位を余儀なく辞して塔頭獅子林院に退隠した獨湛性瑩（一六二八－一七〇六）は近藤語石居士の再三の招請を容れて浜松初山に赴き宝林寺永思堂に寓した。元禄十年（一六九七）春二月に獅子林院に還ったが、初山を去るにあたって一万余人のために授戒会を開き、帰路を近江にとって天龍山梵釋寺で累日緇素五千人余に授戒し、阿育王山石塔寺に遊んで偈を残した。退隠から旬年を経た元禄十五年（一七〇二）夏、大和の霊場参詣を志して檗山を発った。七十五歳の時である。このころにはすでに来朝した隠元隆琦（一五九二－一六七三）の直弟たちは獨湛一人を残してみな亡じてしまっていた。意を決しての旅立ちだった。高弟道成円通が獨湛示寂後二ケ月にして撰した『黄檗四代獨湛和尚行略』[1]は獨湛のこの和州行の旅程を、

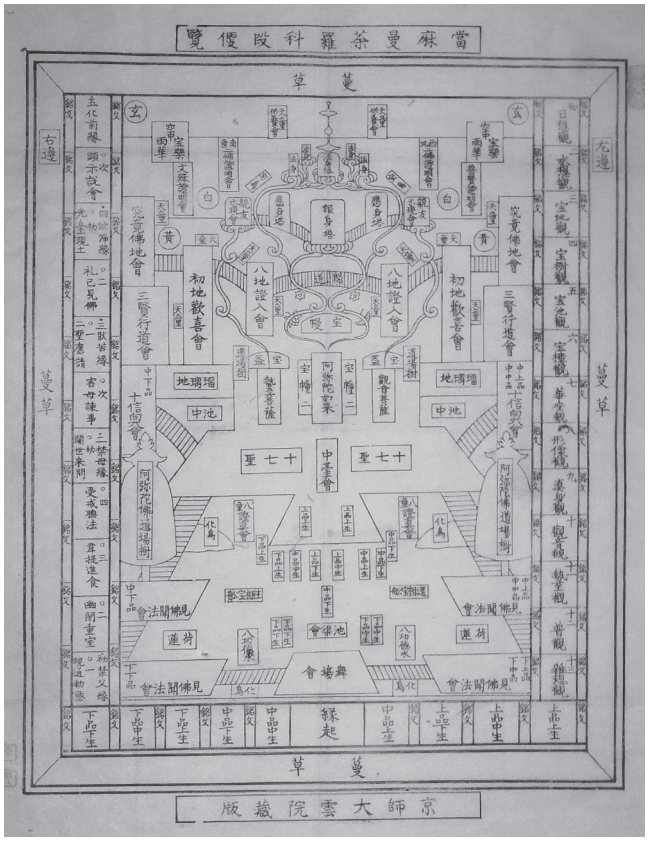
壬午夏偶〳〵遊於和州ノ靈壤ニ先ツ抵リ東大寺ニ瞻ル禮ス毘盧ノ梵像ヲ歴テ二月堂春日社ヲ宿ス于郡陽西岍寺ニ寺主古磵歡迎テ接待款密ナリ師云吾レ有レ志ニ南遊ニ者ノ尚シ矣大殿落成未タ知ニ幾レノ時ト云コトヲ吾老邁衰朽食息不レ期セ今吾不ンハ來ラ而噬トモ臍ヲ何ソ及ハン矣翌日啓行驛路南ニ趨ヲ曲折シテ傃レ西ニ過ニ葛城山ヲ徑ニ距イタリ當麻寺ニ臨ム濯藕井ニ鬱沸タル靈泉清泚涌ス藍ヲ展ニ翫ス西方之圖ヲ有リ浚ク入テ紫雲ノ境ニ半窻夜月虚シ之句甲

と伝えているが、これによって獨湛の旅の主たる目的が東大寺に詣して盧舎那仏を瞻礼し、大和郡山清浄山西岸寺主の明誉古磵に会い、そして當麻寺で西方ノ圖すなわち當麻曼荼羅を閲拝することであったと知れる。誠心誠意の歓迎接待を施しくれる古磵に、獨湛は久しく抱いていた大和の霊場参詣の志をこのたび漸く果しえたことの感激を吐露している。老邁衰朽していつ食息が絶えるか知れず、今来なければ後悔の臍を噬むにも及ばぬ悔いを残すことになったはずだと云い残し、翌日西岸寺を発って駅路を南にまた西に曲折して葛城を越え當麻に向かったのである。

當麻曼荼羅は獨湛が久しく抱いていた以上の感激に値するものであった。獨湛はその感激を「浚入紫雲境半窻夜月虚」と詠じたのであるが、さてしかし獨湛はこれより先の「辛巳年佛成道日」すなわち元禄十四年十二月八日に、當麻曼荼羅を故国に紹介し流通せしめる意図をもって『日本大和州當麻寺化人織造藕絲西方境縁起説』[2]一巻を著し、その年のちに黄檗山第八代住持位に即いた嗣法の弟子悦峰道章（一六五五－一七三四）の助力と華頂山知恩院の良照義山（一六四八－一七一七）の募縁を得て開版しているのであって、その冒頭に「丁丑三月念六日。瑩獨湛到レ寺ニ隨喜見ル此ノ圖依正二報ヲ」と元禄十年三月二十六日に當麻寺を詣し、随喜して當麻曼荼羅を見たと記している。『黄檗四代獨湛和尚行略』は獨湛の和州行は元禄十五年夏が初めてであったような書きぶりであるが、『日本大和州當麻寺化人織造藕絲西方境縁起説』の刊年と獨湛自身による冒頭及び巻末識語の記載を重んじれば、初めてではなかったのである。

淨慧は獨湛の當麻曼荼羅にまつわる右の営為について『佛神感應錄』[3]後集巻第十二四「蓮社ノ七祖ノ事」に、

湛和尚曾和州當麻ノ曼陀羅ヲ拜閲シ且ソノ因縁ヲ聞玉ヒテ．感嘆シ以甚希有ナリトス．因思イヅクンゾ一幀ヲ摹去支那ヱ贈重刻輾轉シテカノ地ノ人ヲシテ不測ノ勝縁ヲ締シメント。因自縁起ヲ改書シテ以時節ヲ待玉フニ。數十年ノ後嗣法ノ沙門悅峰禪師正ニ今黄檗山ノ現住ナリ一幅ヲ繕寫セシメ。和尚ノ縁起ヲ添テ遙ニ支那國有縁ノ居士褚山王ニ贈。板ニ鏤テコレヲ支那ノ諸國ニ流布セシメ。并ニ浙杭東林ノ槃譚老師ニ請テ其事ヲ誌シム．コノ一幅ノ曼陀羅先雲棲大師ノ塔ノ前ヱ寄進スト云コト湛和尚ノ跋ニ見ユ。コノ曼陀羅ヲ付刻傳流テ。以雲棲淨業ノ法門ヲ廣コト眞ノ盛事ナリト云コト槃老師ノ序ニ見ヱタリ．按ズルニ中將姫ノ往生ハ人皇四十九代光仁帝ノ御宇寶龜六年乙卯三月十四日ナリ．元祿辛巳ノ年マデ。スデニ九百二十有七年ヲ歴テ。コノ曼陀羅始テ大唐ニワタリ雲棲大師ノ廟前ニ掛テ。後アマネク支那ノ郡國ニ弘コト。同氣相求同聲相應ズルノ理トハイヒナガラ宿願前縁測ガタキモノ歟。



大雲院蔵版　當麻曼荼羅科段便覧（宮島コレクション蔵）

と記している。これによれば獨湛は當麻曼荼羅を拜閲して感動し、これを摹写して故国に贈り、かの地で板に刻んで巷間に流布し、もって衆生に勝縁を結ばしめん素懐を抱き、ために自らあらたに縁起を草して時節の到来を待っていたのであって、それが数十年を経て嗣法の弟子悅峰道章の助力を得て曼荼羅一幅を摹写せしめ、これに自艸の縁起を添えて故国の有縁褚山王居士に送って後事を託したのだという。その縁起が現伝する『日本大和州當麻寺化人織造藕絲西方境縁起說』であるが、淨慧の一文を重んじれば、獨湛は来日後の早い時期に當麻寺に参詣して當麻曼荼羅を拜閲し、すでに存する當麻曼荼羅縁起とは別に自ら縁起を草していたのである。とすれば獨湛は隱元に随従して承応三年（一六五四）七月に長崎に到着し、寛文四年（一六六四）六月には近藤登之助の招請を容れて遠州浜松に赴き初山宝林寺の寺地を選定しているから、おそらくこの間に當麻寺を詣したものと思われる。

獨湛は『日本大和州當麻寺化人織造藕絲西方境縁起說』の巻末識語に「此圖再裱之時掃下久年蓮絲之粉一將數升一遂製之爲丸病人乞覓頂戴病多痊愈臨終散亂之人頭戴手捧多晏然而終」と記している。いわゆる曼荼羅丸のことである。これについても獨湛は元禄十一年（一六九八）六月に『當麻曼陀羅丸塔寶引』[4]一巻を著していて、當麻曼荼羅から散り落ちた糸くずを集めて丸めこれを宝塔に収めた経緯をわずか六〇〇字の短文で伝えている。獨湛が曼荼羅の糸くずをいつどのようにして入手したものか不明だが、曼荼羅丸は洛東龍池山大雲院六世高誉性愚（一六二九－一六八六）による延宝の當麻曼荼羅大修復事業の副産物であって、その巷間流通の由来が性愚の慈悲業にあったことを大雲院義淵撰『當麻曼荼羅修復縁起』[5]（延享二年〈一七四五〉刊）は延宝八年（一六八〇）の記事中に次のように伝えている。

古變相修覆の時久年亂離する所の藕糸の微屑及積凝する所の香煙の彩塵盡く拂ひ下し採り給ふに殆んど數升あり。性愚ひそかに思へらく、斯れは是安養の佛菩薩の大悲の手より出る所の物にして、實に娑婆濁世の末世未曾有の珍寶なり。縱令佛法非器の大逆無道の極惡人たりとも、若此一塵を心腑に流し

下さば、往劫より積累する所の重惑業障も一時に蠲鎔して、弘願海中の蓮種を生ぜん事是疑ふべきに非ず。爰に於て遂に寶雲寺と謀りて慇に淨製の粘にて丸となし曼荼羅珠とす。是を有縁の道俗に流與するに、其至信の人々は、數日光明赫き或は色轉して五彩となり或は增長して大顆となり或は分發して小舍利と現ず。若妖怪悖亂沈に犯さるゝ人一度是を頂戴し少し斗りも咽に入るゝ時は忽ち不祥を去り正念に住し、或は快愈して善心を生じ、或は稱名して終焉を取り、如斯の大利益に遇ふ者世に多し。擧げて算ふべからず。皆是法如の一願より生じぬる事こそ難有けれ。

淨慧も當麻曼荼羅や曼荼羅丸に強い関心を抱いていた。たとえば『佛神感應錄』巻十二にも、四「蓮社ノ七祖ノ事」、五「本朝三曼陀羅ノ事」、六「當麻ノ直西法師往生ノ事」などに獨湛の行実や當麻曼荼羅に縷々触れており、六「當麻ノ直西法師往生ノ事」には「過シ元祿ノ春友ト當麻ヱ趣シ」と、當麻寺護念院で剃髪し、役行者が穿ち、中將姫が日想觀を行じたという二上山の岩窟でただひたすら念佛して往生を遂げた直西法師の故地を訪ねている。淨慧は元禄十三年（一七〇〇）二月、大和生駒山所在の真言律宗西大寺末の帝釈山長命寺に入寺しているから、あるいはそのころ當麻を詣したものと思われ、そうだとすれば同伴したのは長命寺在住中に交友のあった隣院西大寺末金龍山長福寺の晴雲比丘[6]であったと推量される。なお長命寺本堂の扁額「帝釈山」は獨湛の揮毫というから、淨慧は獨湛が獅子林院に退隠したのちも交流を保っていたことが知られる。

曼荼羅丸についても淨慧は元禄四年（一六九一）七月に洛陽錦小路新町の永田調兵衛から版行した『古今舍利驗論』巻下末十「曼陀羅丸ノ事付霊驗ノ事」[7]に、

抑コノ曼陀羅丸ノ由來ヲタヅヌルニ。和州當麻寺ノ曼陀羅フルクソコネタルヲ洛陽大雲院高誉上人拜覧シテ。コレヲナゲキ思ハレケルガ。中嶋氏久圓ト云ル持戒念佛ノ信者ヲカタラヒテ。去ル延寶五年ニ修復ノ評議一決セリ。コヽニ深草寶雲法師トテ。欣蓮勇猛ノ行者アリケリ。而カヽルコトニ堪能ナレバ。是ヲキイテ甚隨喜シ宏善トイヘル表具師ヲカタラヒツヽ。五月十七日ニ染井ノ水ヲ以ヤヲラ浸テ蓮絹ヲメクリ下サント議セラレケルガ。イタク古タル絹ナレバ。急ハ仕損ズベケレバトテ。カネテハ日ヲ重ベキ巧ナリケルニ三寶諸神ノ加護ヤアリケン。不思議ノ瑞相ナドアリテ。カネテノ支度ヨリ不日ニ安ラカニメクレテ。萬心ノマヽニゾ調テゲリ。ソノ時ニチリコボレタル絲クズ。ホコリヤウノモノナドヲハラヒアツメテ。寶雲ノ小丸シテ有縁ノ人人ニホドコサレヌ。マコトニ佛ノ不思議境界ナレバ微塵裏ニ安住シテ大法輪ヲ轉ジ玉フトナレバ・寶雲ノ心ヅカヒ殊勝ニシテ。結縁ノ人コソタノモシケレ。コレヨリサキニモソコネチリタル糸クズノホコリマジリナリケルヲ。ソノワタリナル尼女ノヒロヒアツメテ・丸ジヲキ。因ニ人ニホドコストキヽシガ。カノ寶雲ノヒロクホドコサレヌルニゾ。人アマネクコレヲタフトミ。利益ノホドモアラハレケリ

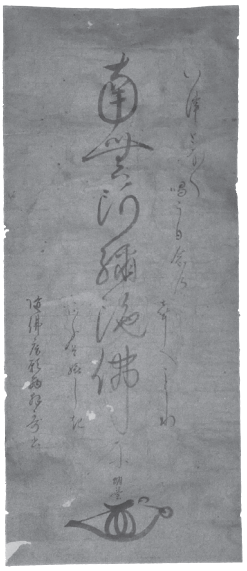
○京極五条ワタリニ羽箒屋ナニガシ世ノイトナミニノミホダサレ悪ニノミタヅサハリテ。サラニ信心ナカリケリ。ソノ妻ハ信心アツテ。願往生ノ心モフカヽリキ。ソレニヨツテ。時々ハ夫ヲスヽムレトモカツテ用ヒズ。時ニ延宝六年ノ春・當麻ノ曼陀羅修復出來シテ。諸人結縁ノ為ニ開帳アリケリ。カノシウトナリケル金具屋ノ某夫婦モ参詣シケリ。同年ノ夏羽箒屋病ニフシヌ。事スデニキワマリケル時ウダウダトネ入ケルニ。金具屋夫婦カノ曼陀羅丸ヲノマセケレバ。シバラクアツテ目ヲヒラキ我今夢中ニ當麻ニマウデヽ曼陀羅ヲハジメテ。諸堂コトゴトク拜メグレリ。各ハコノ春マウデ玉ヘリ。ソノ時ミ玉ヒシト相違ナキヤキヽ玉ヘトテ。一一コレヲ語ニツユタガフコトナシ・各奇妙ナリト感ズ。ソレヨリ信心發起シテ・念佛相續シソノ日往生ヲトゲヌ。マコトニ大切ノ時ニ到テカク一念發起スルコトコレヒトヘニコノ曼陀羅丸ノ功德ナリ

と語り出し、以降にも曼荼羅丸の由来とその効験利益を記し、現益を蒙った人々の実例を種々挙げている。延宝五年（一六七七）から始められた大雲院性愚による當麻曼荼羅大修復事業の参加者たちについても具体的に録しており、『當麻曼荼羅修復縁起』と併せ見るべき有益な資料と思われる。淨慧は一篇の末尾を「抑當麻ノ曼陀羅トハソノカミ極樂ノ弥陀如來ト觀世音直ニ化現マシマシツヽ藕絲ヲ五色ニソメテ淨土ノ變相ヲ織セ玉ヒテ中將姫ニアタヘ玉フナル三国不思議ノ霊幢ナリ。縁起具ニ元亨釈書及西誉上

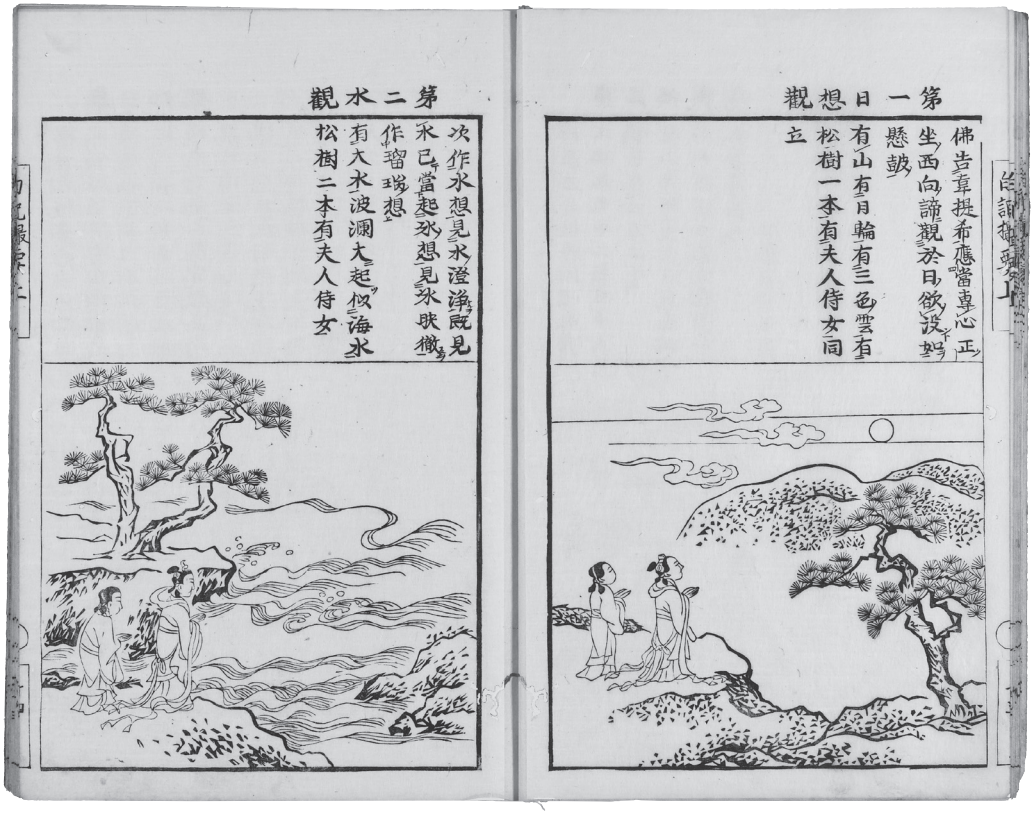
人ノ曼陀羅鈔袋中和尚ノ白ノ記等ニミヱタリ。カヽル希代ノ霊物ナレバ。一絲一塵ニ至テモ霊驗アルコソ理ナレ」と結んでいるが、この一篇は淨慧が深草の寶雲法師、あるいはその近習から聞いた話かと思われる。まことに具体に富んでおり、當麻曼荼羅修復という大事業の裏面や周辺に生じた種々の世事をこと細かに記しており、直西法師の故地を訪ねたことといい、淨慧の真骨頂をよく示している。

※

元禄十五年夏、獨湛は大和の霊場を巡拝した。高弟円通撰『黄檗四代獨湛和尚行略』の所伝を重んじれば、それは和州行を積年の志としていた獨湛が老邁衰朽食息不期という現実にあって選択した意を決しての旅立ちだった。しかしそれには洛東報恩寺を辞して大和郡山の西岸寺主[8]に即いた明誉古磵（一六五三－一七一七）の熱心な慫慂があったからだろうと思われる。たしかな証左は見出せないが、「今吾不ンハ來ラ而噬トモ臍ヲ何ソ及ハン矣」の一文は獨湛の本心の吐露であって、もってそれは旧知の古磵に対する礼辞だったように思われるのである。おそらく二人には長い交流の歴史があったのであろう。古磵は江戸芝三縁山増上寺で修行中の元禄元年（一六八八）十月、増上寺門前書肆林重郎兵衛・玉置次郎兵衛から絵入版本『當麻曼陀羅白記撮要』二巻一冊を版行し、元禄十年には木版彩色の『當麻曼荼羅圖』を開版した。ことに『當麻曼陀羅白記撮要』はいわば當麻曼荼羅の絵入りの概説書であって、當麻曼荼羅を故国の衆生に流通せしめる願いを長年月心中に懐いていた獨湛がこれを閲しないはずはなかろうから、この書を契機として交流が生じたものと推量される。すなわち二人は初対面ではなかったろうということだ。



古磵筆　六字名号
（宮島コレクション蔵）

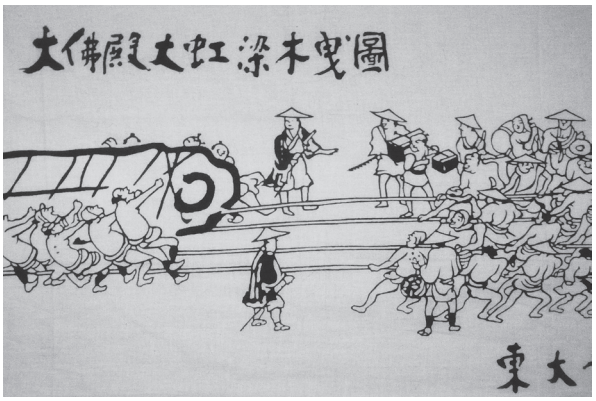


當麻曼陀羅白記撮要（九州大学図書館蔵）

淨慧の記した「蓮社ノ七祖ノ事」の一文から、獨湛は来朝後まもなく當麻寺を詣したと推量されるが、その折にはおそらく東大寺にも詣し廬舎那仏を瞻礼したと思われる。それは永禄十年（一五六七）十一月に松永久秀軍の濫妨放火によって損壊し露座のままの大像であったはずである。大仏は式部卿公慶上人が身命を擲って精励刻苦した一紙半銭の勧進によって元禄五年三月八日に再造の完成をみたのであるが、その三月八日から翌四月八日まで執行された開眼供養法会には諸寺万僧の出仕があった。『古稀轉變見聞書』[9]によれば、

出仕之事興福・東大・法隆・招提・薬師　菩提・黄檗山住持唐僧達中之僧、時宗鉢たゝき、河内平野大念佛寺大通上人、和州・河内・近國之老中、和州一國の隱亡不殘出仕也、

とあって黄檗山から住持及び唐僧・達中（塔頭であろう）の僧たちの出仕があったことを伝えている。この時の檗山住持は高泉性敦であって、高泉に随従しての出仕をおそらく獨湛はしなかったものと思われる。そうであれば元禄十五年夏の参詣はかつて露座の大仏を瞻礼した獨湛にとって、それのみごとに修復された雄姿を拝しえたことはこの上ない歓びであったと思われる。當麻曼荼羅のことばかりでなく、大仏のこと、大仏殿のことも一夜をともに過ごした古磵と語りあったことであろう。古磵もまた後年宝永元年（一七〇四）に大作『大佛殿大虹梁木曳圖』絵巻一巻を描いているのである。



大佛殿大虹梁木曳圖　東大寺大仏殿土産手拭（宮島コレクション蔵）

獨湛の『日本大和州當麻寺化人織造藕絲西方境縁起說』の開版に募縁助力した華頂山知恩院の良照義山は古磵と増上寺における修業時代が重なり、古磵が洛中上小川所在の堯天山報恩寺現住のころ、前住證誉湛澄（一六五一－一七一二）・洛下の西方行者僧雲竹（一六三一－一七〇三）と製作した『贈圓光大師號繪詞』三卷の詞書を担当した雲竹は導故院広誉厭求（一六三四－一七一五）の弟子で、松尾芭蕉に書法を授けたことで著名だが、また義山が重修した『圓光大師行狀圖翼賛』（六十卷。元禄十六年〈一七〇三〉成立）に字句と絵の清書に参加した人である。義山・古磵・雲竹が相互に連帯した事業も少なくない。この『圓光大師行狀圖翼賛』の製作事業には鹿ヶ谷の宣誉忍澂（一六四五－一七一一）が白銀一〇〇両を寄進したと伝え、古磵は忍澂の肖像画『獅壑上人像』（法然院蔵）を描いてもいるから、近世浄土宗発展の主導的存在だった忍澂・義山の近縁に古磵も雲竹もいたのである。

古磵の前住湛澄は『三部仮名鈔』『空花和歌集』『女人往生伝』等の著作で知られる学僧で、『無能和尚行業記』下卷によると、『長西録』すなわち『浄土依憑経論章疏目録』を読んで恵心僧都に「来迎讃」があることを知り、長らくこれを求めていたが、たまたま當麻寺を詣した折に迎講で誦される讃歌が「来迎讃」であることに気づき、のちに完本を得て世中に流布させた人である。その湛澄について『京兆報恩寺仏牙記』[10]に引く高泉性敦（一六三三－一六九五）の『洗雲集』の一節に、「貞享五年。當代寺主證譽公恪遵祖命。方設法會。廣陳供養者約五十。日特延予觀禮。予以事阻不果行。公不得已。與其法友專譽公。奉佛牙等。至佛國。屬予記」とあって、湛澄は報恩寺十四世住持の折の貞享五年（一六八八）、前住暁誉督阿の遺命を守って涅槃会を催し、供養者五十人を選んで招請したが、高泉だけが事情があって参会できなかった。すると湛澄は法友の専誉とともに仏牙舎利をわざわざ伏見深草の天王山佛國寺まで奉じ来って高泉記を草することを依頼したと伝えている。専誉はのちに知恩院四十世に即いた専誉孤雲（一六九一）であろうか。『洗雲集』のわずかな記事ではあるが、湛澄の人となりと浄土宗学僧の黄檗高僧に対する敬意のほどが窺い知られて興味ふかい。

黄檗の高泉性敦は大雲院性愚とも交流があった。空也廟として知られる

洛東清水道所在の大悲山空也院西光寺は、『蓮門精舎舊詞』第二冊によるとかつては宇治郡山科郷東野村にあって安和二年（九六九）空也上人の開山と伝え、天和二年（一六八二）洛陽龍池山大雲院六世高譽性愚が退隠後にここに移って再興したもので、「天和三癸亥年黄檗高泉和尚勒碑銘」が存したという。この碑は今も西光寺の空也廟脇に建つ「空也上人遊行之碑」であって、當麻曼荼羅の大修復事業を終え、空也院を再興した性愚の依頼によって高泉が撰文したものであることは疑いを容れない。大雲院蔵「厨子入中将姫像」[11]は性愚の寄進したものであるが、厨子扉内面・厨子奥壁に中将姫説話が絵画化されていて、画中に性愚の高弟大雲院第九世光誉貞龍が「當麻古新兩曼陁羅修復并重新變相寫造之」（延宝九年〈一六八一〉四月十四日記）と記している。性愚はまた餓民救済に励んだ人で、大雲院境内に建つ天和二年三月二十五日光誉貞龍記の「高譽性愚上人孔方十二錢施與碑」（仮称）によると、性愚は連年の凶荒で多数の餓死者・流民が出たのを座視できず、信檀徒十万の助縁を得て天和二年正月八日から三十九日間にわたって餓民男女老少を問わず一人毎に孔方十二銭を施与し、その数は二十六万六千二十九人に上ったといい、それは「欲使施者受者有縁無縁並已死未死之輩共超困苦之海到安養之界」という性愚の志願によるものだと伝え、その慈悲業を顕彰している。この性愚と高泉は交流があったのであり、浄慧はまた高泉と貞享四年（一六八七）には確実に面受[12]しているのであって、たとえば性愚による當麻曼荼羅大修復事業の詳細を高泉から、あるいは高泉を通じて知った性愚の門弟たちからも耳にしていたと推量しても不適当ではあるまい。

獨湛もまた浄土宗僧と交流があった。『日本大和州當麻寺化人織造藕絲西方境縁起説』の上梓は義山（一六四八－一七一七）の募縁助力によるものであり、元禄十六年正月に洛東錦陵山聖光寺所蔵の『青海曼陀羅』を閲拝してその縁起を書いたとき、この曼陀羅を臨写したのは義山門下の無塵居士すなわち広野良吟だった。また没前の病床に見舞いを受け、『勸修作福念佛圖説』の後事を託した鹿ヶ谷の忍澂とは、堺の法行寺にあった忍澂が延宝七年（一六七九）『光明大師別傳纂註』二巻を上梓したとき、随喜した獨湛が伽陀一章を贈って讃歎したのが道交の機縁だったと思われる。なお浄慧は忍澂とも地蔵信仰を通して親近していたのであって、元禄三年（一六九〇）忍澂が吾身と等身の地蔵菩薩像を鋳造し、山壁を鑿ち岩屋を造って奉安したとき、浄慧は開眼供の慶賛導師として招請されるほどの尊重を受けているのである。

思いのほか黄檗僧と浄土宗僧の交流は広く深い。近世浄土教の流布発展を主導した忍澂や義山の周縁に湛澄・古磵・雲竹をはじめとする浄土宗僧ばかりでなく、獨湛・高泉・浄慧など黄檗僧たちも親近していたことは忘れるべきではない。また獨湛や高泉が比較的自由に行実を果たせたその経済的基盤の一端には、たとえば錦袋円をもって巨利を得、その蓄財をもって大蔵経を購入し、宗派を超えて二十一ヶ寺に寄進するなど仏道発展のために惜しげもなく施財した羅刹僧了翁道覚（一六三〇－一七〇七）のような存在があったことも看過すべきではあるまい。了翁は獨湛を尊重して母山黄檗に、あるいは師匠高泉が開山した佛國寺にことあるごとに多額の施財をしていたこと、また報恩を忘れぬ人であったことはその行状記[13]がよく伝えている。

なお、獨湛と高泉は元禄五年の黄檗山住持位をめぐる一件から確執を生じ、以後は疎遠になったと説明するむきもあるが、高泉の詩文を弟子の道亨・道喜・道峻が編録した『高泉禪師法苑畧集』（五巻一冊。寛文十年〈一六七〇〉五月、村上勘兵衛刊）には初山獨湛が序文を寄せ、巻四には獨湛が初山宝林寺の寺地を選定したという報に接した高泉は「寄初山湛和尚書」を贈って讃している。こうした良好な交友が疎遠になったとしても、両人の間を繋いだのはたとえば了翁であり、また浄慧のような存在であったと思われる。

（関口）

〔注〕

1　田中実マルコス氏『黄檗禅と浄土教―萬福寺第四祖獨湛の思想と行動』（二〇一四年二月、法蔵館）付編『獨湛全集』所載影印に據る。

2　田中氏前掲書に翻刻が載る。本文引用はそれに據る。

3　名古屋大学図書館蔵本に據る。

4　田中氏前掲書所載の解題に據る。

5 横井徹山氏編『後曼荼羅院陳阿靈仰師述 當麻曼荼羅講説 原名捜玄疏採摘聽書』（一九二九年六月、光明寺刊）所収に據る。

6 西田耕三氏『近世の僧と文学―妙は唯その人に存す』（二〇一〇年二月、ぺりかん社）「第一章 ある僧の軌跡 11生駒長命寺」に詳しい。

7 東洋大学図書館哲学堂文庫蔵の三巻三冊本に據る。同書の刊記は以下の通り

元禄四年辛未年僧自恣日
沙門妙幢淨慧謹跋
洛陽錦小路新町西入町
永田調兵衛梓行

蔵書印「宝林寺」は初山宝林寺と思われる。なお国立国会図書館に写本一冊の所蔵がある。本学人間文化学部日本語・日本文学科二年生塚本紗英さんの御示教によると、同写本は巻之中末と巻之下本を欠き、加えて製本時に生じた乱丁があるという。

8 大谷徹奘師「画僧・古磵（こかん）の生涯」（『特別展没後三〇〇年画僧古磵』二〇一七年五月、大和文華館）は、西岸寺蔵『西岸寺累代上人畧譜』に古磵の名はないので、「住職としてではなく、別の形で西岸寺に住していた」とされる。

9 『公慶上人年譜聚英』（東大寺編刊、一九五四年七月）所収に據る。

10 『西大寺叡尊伝記集成』（奈良国立文化財研究所監修、一九七七年十月、法蔵館）所収に據る。

古磵筆　恵比寿図（宮島コレクション蔵）

11 築達榮八氏編『龍池山大雲院』（一九九四年九月、本山龍池山大雲院刊）に写真が載る。

12 西田耕三氏前掲書「第一章 ある僧の軌跡 12橋本松斎」に詳しい。

13 拙稿「国立国会図書館蔵『錦袋円祖傳』翻刻と解題」（『学苑』第九一七号、二〇一七年三月）・「昭和女子大学図書館蔵『東叡山勧學講院開祖 了翁祖休禅師行業記 全』翻刻と解題」（『学苑』第九二五号、二〇一七年一一月）。

〔翻刻凡例〕

一、名古屋大学図書館蔵『佛神感應錄』十五巻八冊のうち後集七巻四冊を底本とした。前集が宝永七年九月、洛陽書肆永田調兵衛鋟梓なので、後集は翌宝永八年（正徳元年、一七一一）の上梓と思われる。翻刻を御許可下さった名古屋大学図書館に謝意を表す。

なお書誌は以下の通り。

袋綴装十五巻八冊（前集八巻四冊、後集七巻四冊）。縦二五・七×一八・〇糎。各冊丁数、（一）五六、（二）四五、（三）四六、（四）四四、（五）四三、（六）四五、（七）五四、（八）二六。各冊黄蘗色紙表紙。左肩に刷題簽（四冊目は剥離）あり。角書「三國／因縁」、外題「佛神感應錄序目録一（二・三・五・六・七・八）」、内題「佛神感應錄」、柱題「佛神感應錄」（魚尾あり）、小口題「佛感錄」。匡郭単辺一〇行。前集第四冊巻八末丁に「右佛神感應錄前編八巻　後集八冊來／辛夘正月出來焉／寶永七庚寅暦九月吉日／洛陽書肆　永田調兵衛鋟梓」と刊記あり。また第一冊表紙右下に「蓮池堂藏本」と墨書がある。二冊目以降は各冊これが擦り消され、そのかわり外題左下に小字で「蓮池堂」と墨書されている。明治時代の浮世絵師蓮池堂の蔵書であったと知られる。（阿部記）

一、可能なかぎり原文の表記を尊重し、明らかな誤刻もそのまま翻刻したが、「未・末」「己・已・巳」等の混用表記は文意をとって適字を置き、「丁」（コト）等の合字は通行の表記に改め、摺墨の濃淡等による判読不能の文字は字数分の空格（□）を置いた。

一、半丁ごとに丁数を示し、各話末行と次話題との間に空行を置いた。